

日田市埋蔵文化財調査報告書第25集

# 元宮遺跡

2000年

日田市教育委員会



笠 塔 婆

## 序 文

元宮遺跡は元大波羅神社北側の丘陵に位置し、遺跡のすぐそばには江戸時代の道路であったことを示す道標も残っています。

今回、報告いたします元宮遺跡からは古墳時代の墓や中世の塚・笠塔婆が発見されました。中でも笠塔婆は元大波羅神社の宮司・総代・氏子の皆様の好意により元大波羅神社境内に移転・安置されることになり、日田市の有形文化財に指定されることになりました。

このたび発行いたします本書が、郷土の歴史を知る上での一助としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査や整理作業、報告書作成にあたってご協力をいただきました皆様に心より謝意を申し上げます。

平成12年9月

日田市教育委員会教育長 加 藤 正 俊

## 例 言

1. 本書は社会福祉法人翠明会からの委託を受け、平成11年度に発掘調査を実施した元宮遺跡3次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘現場での実測は土居・行時・吉田・若杉、遺構写真は行時・吉田・若杉のほか、文化財写真家長谷川正美氏に撮影いただいたものを使用した。
3. 本書に使用した遺物の実測は若杉、遺構遺物の製図は若杉のほか雅企画有限会社にトレース委託したものを使用した。
4. 遺物写真は雅企画有限会社に撮影委託したものを使用した。
5. なお、出土遺物や図面類については、日田市埋蔵文化財センターに保管している。
6. 本書の執筆・編集は行時との協議の上、若杉が行った。

## 本 文 目 次

I はじめに .....	1
1. 調査の経緯 .....	1
2. 調査組織 .....	1
II 遺跡の位置と環境 .....	2
III 調査の記録 .....	4
1. 墓 .....	4
2. 土坑 .....	9
3. その他の遺構 .....	12
IV まとめ .....	18

## 挿図目次

- |                |                         |
|----------------|-------------------------|
| 第1図 遺跡位置図      | 第8図 土坑実測図(2)            |
| 第2図 遺跡周辺の主要分布図 | 第9図 1号塚調査前測量図           |
| 第3図 遺構配置図      | 第10図 1号塚表土除去後測量図及び土層断面図 |
| 第4図 1号墓実測図     | 第11図 1号塚出土土器実測図         |
| 第5図 2~6号墓実測図   | 第12図 1号塚盛土除去後測量図        |
| 第6図 墓出土遺物実測図   | 第13図 笠塔婆実測図             |
| 第7図 土坑実測図(1)   | 第14図 方形周溝状遺構測量図         |

## 表 目 次

- 第1表 出土小玉観察表

## 図版目次

### 卷頭図版 笠塔婆

- |                         |                     |
|-------------------------|---------------------|
| 図版1 上 遺跡全景(上空より)        | 下 遺跡全景(西より)         |
| 図版2 左上 1号墓蓋石検出状況(西より)   | 右上 1号墓完掘状況(西より)     |
| 左中 2号墓完掘状況(北東より)        | 右中 2号墓遺物出土状況        |
| 左下 3号墓完掘状況(南より)         | 右下 3号墓遺物出土状況        |
| 図版3 左上 4号墓完掘状況(西より)     | 右上 6号墓完掘状況(西より)     |
| 左中 2号土坑完掘状況(南より)        | 右中 3号土坑(南より)        |
| 左下 4号土坑完掘状況(東より)        | 右下 6号土坑完掘状況(北東より)   |
| 図版4 左上 9号土坑完掘状況(北より)    | 右上 11号土坑完掘状況(北より)   |
| 左中 笠塔婆(正面)              | 右中 笠塔婆(裏面)          |
| 下 1号塚土層断面               |                     |
| 図版5 左上 1号塚完掘状況(東より)     | 右上 1号塚完掘状況(西より)     |
| 左中 1号塚・方形周溝状遺構完掘状況(東より) | 右中 方形周溝状遺構完掘状況(東より) |
| 左下 笠塔婆移転作業              | 右下 笠塔婆移転作業          |
| 図版6 出土遺物                |                     |

## I はじめに

### 1. 調査に至る経過

平成11年1月5日付けで社会福祉法人翠明会より、日田市大字求来里字堂園607-2他にケアハウス建設を行う趣旨の照会文が日田市教育委員会に提出された。この開発予定地は周知遺跡の元宮遺跡に該当し、また予定地には中世に立てられたと考えられる石塔が1基存在すること、さらにその隣接地では平成10年度に古墳時代の箱式石棺墓も発見、調査され、その時期の墓地群が開発予定地まで広がる可能性が高いこともあり、土地所有者の承諾を得た上で、平成11年3月16日から31日まで試掘調査を実施した。その結果、予定地内からは別の石塔に付属する可能性のある溝跡や土坑などが発見された。このことから事業者と今後の遺跡の取り扱いについて協議を行い、開発予定地は建物建設部分については切土工事で発掘調査を実施し、それ以外は緑地帯で保存すること、さらに石塔については現状保存は困難とのことから、調査が終了した後、事業者側で移築することなどを確認し、平成11年9月17日に委託契約を締結し、同年9月28日より発掘調査を実施することとなった。

調査では、まず建物建設予定地の表土を除去し、緑地帯の部分に土を運搬した。その後、遺構検出作業に移っていったが、試掘調査では確認できなかった古墳時代の石棺墓なども検出された。また石塔は試掘調査に入る以前から周辺の畠地と比べ50cmほどの高まりが見られたが、その部分にトレンチを入れて観察した結果、版築により盛土された塹であることが明らかとなった。この石塔は近くの元大原社の宮司、総代、氏子の方々の承諾を得た上で、調査が終了する直前の11月9日に元大原社に移築した。その後調査は、各遺構の写真撮影並びに遺構実測を順次終え、同年11月19日にすべての発掘調査業務を終了した。なお、整理作業は平成12年6月1日から6月30日まで行った。

### 2. 調査の組織

調査組織は以下のとおりである。

調査主体：日田市教育委員会

調査責任者：加藤正俊（日田市教育長）

調査事務：原田俊隆（文化課課長） 石井英信（同課長補佐）佐々木豊文（同主査）

美野寿美香（同臨時職員）～平成12年3月 江田香織（同臨時職員）平成12年4月～

調査員：土居和幸（文化課主任）～平成12年3月 行時志郎（同主任）吉田博嗣（同主任）

若杉竜太（同主事）

渡邊隆行（同主事）平成12年4月～

調査作業員：渡辺芳五郎 高野瞳 野村勉 清水忠造

小野忠臣 小下一 吉弘昇 五反田静子

財津由太 本田忠勝 本田早苗 田中昇

松岡初次 高倉美利 高倉富美子

財津利枝 坂本今朝人 坂本都美子

一ノ宮嘉蔵 三浦陽子

整理作業員：穴井トヨ子 朝倉真佐子



写真1 作業風景

## II 遺跡の位置と環境

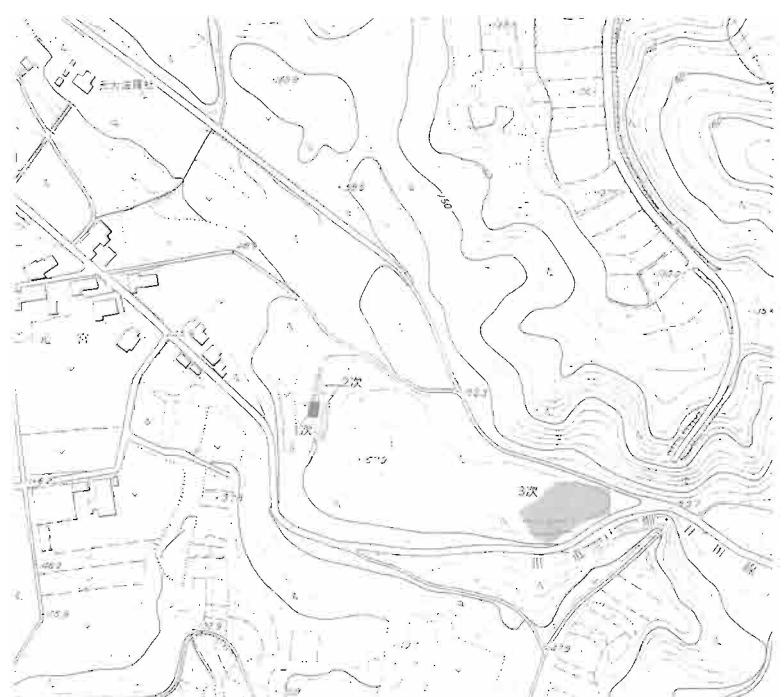
元宮遺跡がある日田市は大分県西部にあり、西は福岡県と南は日田郡を介して熊本県と接している。現在の日田市街地の中心を流れる三隈川は天瀬町より東部では玖珠川と呼ばれ、大分県中部の湯布院を源とし、九重・玖珠を貫流し、日田盆地で小河川と合流し、流域面積を広げながら福岡県に入り、筑後川となり有明海に注いでいる。

日田盆地は地形的には大肥川・三隈川の合流点より上流をさす。この合流点付近で標高が最も低く約65m、盆地中心で約75~90mである。これらの盆地の外側に阿蘇4火碎流の堆積面に緩傾斜の平坦面が広がる。盆地東部の一尺八寸山と月出山岳の間に200~560mの急傾斜面があり、その東方に耶馬溪火碎流によって形成された平坦面が標高400~600mの間に広がっている。さらにその上に一尺八寸山、月出山岳が一部緩傾斜面をなしつつ、残丘状に突出している。一方、盆地内では小河川が形成した段丘面、沖積面が広がり、また周囲の浸食により形成された月隈山、星隈山、日隈山、隈山などの残丘が見られる。

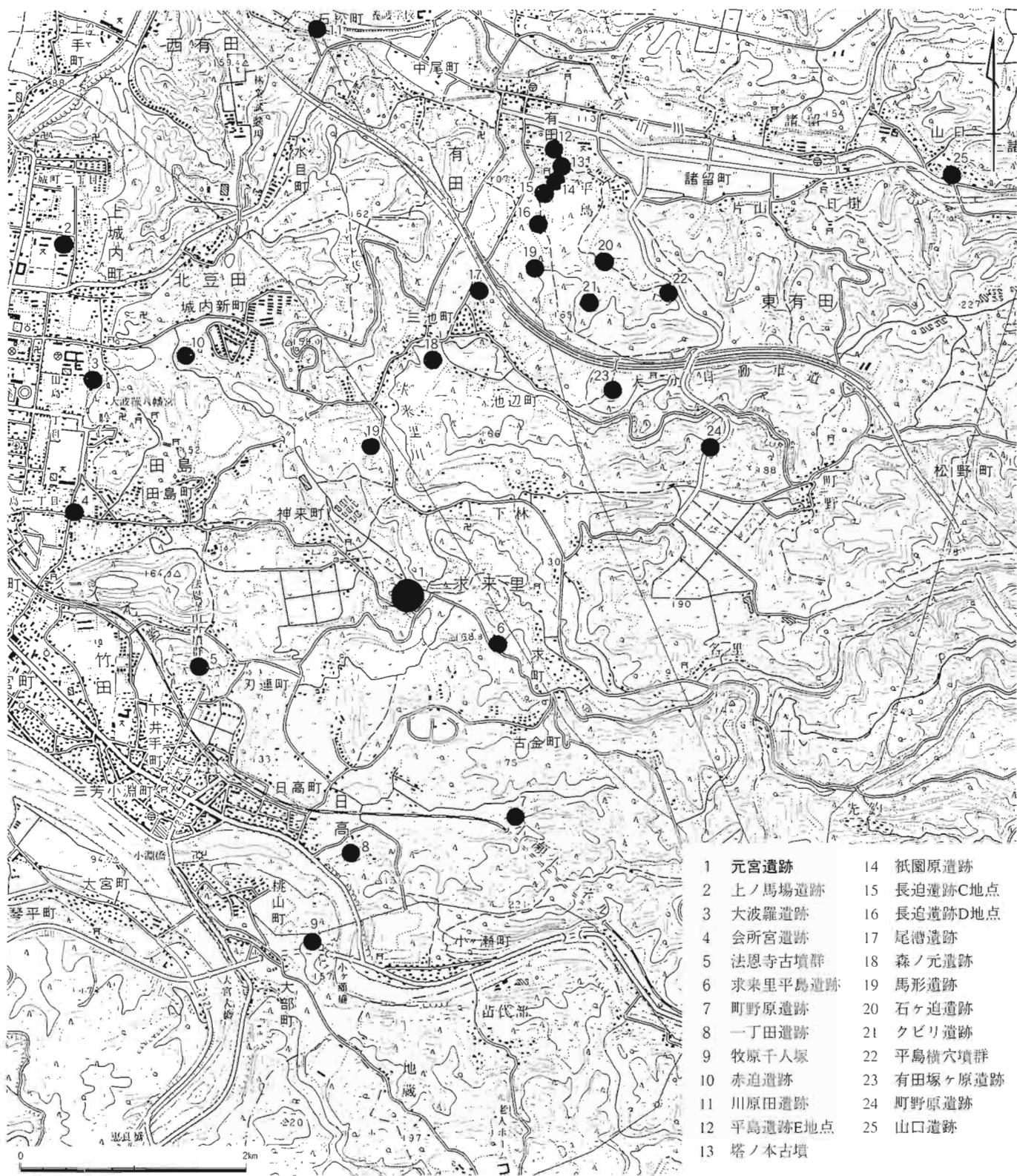
元宮遺跡は日田盆地東部の通称「元宮原」と呼ばれる台地や丘陵上一帯をさすが、今回の調査区は元宮原台地が見下ろせる標高155m前後的小高い丘陵平坦部にある。元宮原台地の北側から東側にかけては求来里川によって浸食された谷地形が発達している。南側は大山川と三隈川が合流する地点で、阿蘇4火碎流堆積面を側方浸食した河岸段丘が発達しているところである。

元宮遺跡はこれまでに数回の発掘調査が行われた<sup>(1)</sup>。今回の調査地点の西側の1・2次調査区では土砂採取に伴う発掘調査が行われ、箱式石棺墓や弥生時代後期の甕棺墓が出土している。また、周辺では畠地開墾の際に弥生土器や大型成人用甕棺墓・箱式石棺墓などが、今回の調査地点の南側を通る県道建設の際には、大量の遺物が発見されている。元宮遺跡周辺では、遺跡から眼下に見下ろす求来里川沿いの谷状沖積地の微高地上に求来里平島遺跡が存在する<sup>(2)</sup>。広域農道建設に伴って調査されたこの遺跡からは縄文時代晩期の土坑、古墳時代中期~後期の堅穴式住居が調査された。いずれの堅穴式住居の壁面にも竈が布設されていたが、特にB区で発見された堅穴住居跡のコーナーにつくられた竈は須恵器を伴わず、土師器の形態から市内でも最古の竈の事例である。また、A区の堅穴式住居出土の須恵器の器台は市内の出土例としては最古となろう。また同じく求来里川沿いの下流で元宮遺跡の丘陵を北へ下った地点には馬形遺跡がある<sup>(3)</sup>。ここでは、古墳時代の堅穴式住居や掘立柱建物のほか、中国越州系青磁碗片を伴った古代の木棺墓も発見されている。求来里平島遺跡の東の通称町野原台地上には縄文時代の黒曜石片や古墳時代の須恵器・土師器が採集された町野原遺跡がある<sup>(4)</sup>。

また元宮遺跡南東の独立丘陵上には7基の円墳が群集する法恩寺山古墳群があ



第1図 遺跡位置図 (1/5,000)



第2図 遺跡周辺の主要分布図 (1/25,000)

る。そのうち3号墳は径約20mの円墳で複室の横穴式石室を持ち、玄室や右側壁、袖石、楣石などに赤を使って円文・同心円文・馬・鳥・人物が描かれており、須恵器・馬具・玉類が出土している。

- 註 (1) 土居和幸「元宮遺跡」『平成10年度日田市埋蔵文化財年報』2000年
- (2) 土居和幸・森山敬一郎「求来里平島遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』VIII 1993年
- (3) 土居和幸・行時志郎・永田裕久『馬形遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書 第16集 1998年
- (4) 行時志郎「町野原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』V 1990年

### III 調査の内容

調査では石蓋土坑墓を含む墓が5基、土坑が11基、塚、方形周溝状遺構が発見された。

#### (1) 墓（第4、5図）

##### 1号墓（第4図）

主軸をN-74°-Wにとる石蓋土坑墓である。墓坑は2段掘りで、1段目の掘り方は長軸2m82cm、短軸1m17cmを測る。石蓋は凝灰岩質の安山岩を大きく4枚使用し、その間を比較的小さい石で充填している。墓坑は長軸1m84cm、短軸51cmを測る。深さは東側が約40cm、西が約50cmである。西側に向かってやや傾斜していることから東側が頭位方向と考えられる。また、遺物は刀子が1点出土しており（第6図31）、その出土位置からも東側が頭位方向であることが指摘できる。

また、墓坑内には他の墓の埋土とは異なる色の土が大量に混じり、同じく壁の土色も異なっていた。さらにこの墓坑の床面と壁の色が異なっていたこともなり、埋土中には壁を貼った土が大量に崩落していたのではないかと考えられる。

##### 2号墓（第5図1）

墓坑内から安山岩片が出土したことから石蓋土坑墓と考えられる。墓坑の規模は長軸1m36cm、短軸39cmである。また、深さは上面が削平されており遺構検出面より約5cmと浅い。主軸をN-63°-Wにとる。2号墓からは刀子が1点（第6図30）、勾玉1点（第6図28）、小玉が33点出土している（第6図1～27・第1表）。これら遺物の出土位置から頭位方向は北と考えられる。

##### 3号墓（第5図2）

墓坑は長軸1m38cm、短軸30cm、深さ25cmである。主軸をN-84°-Wにとる。墓坑内から鉄鏃が1点床面直上より出土している（第6図29）。墓坑内からは石材などは出土しておらず、またその抜跡も検出されなかったことから土坑墓の可能性が高い。墓坑の幅は東側が広く、また遺物の出土位置から頭位方向は東と考えられる。

##### 4号墓（第5図3）

墓坑は長軸1m53cm、短軸48cm、深さ17～20cmで、主軸をN-90°-Wにとる。墓坑内からは石材が出土しており、その抜き取り痕が検出されていないことから、石蓋土坑墓の可能性が指摘できる。また、東側はピットによる搅乱を受けている。頭位方向は墓坑の幅から東側であったと考えられる。出土遺物はなかった。

##### 5号墓（第5図4）

墓坑は主軸をN-83°-Wにとり、その規模は長軸1m76cm、短軸1m12cm、深さ30～62cmである。床面に近い位置で段が見られることから、本来の墓坑の幅は50cm前後で、それより上は風倒木などの後世の搅乱によるものと考えることもできる。墓坑内からは石材片が出土しており、石蓋土坑墓であったと考えられる。頭位方向は床面のレベル差から東側であった可能性が高い。遺物は出土しなかった。

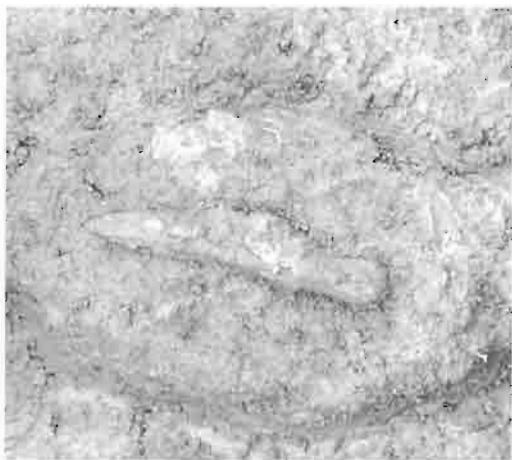
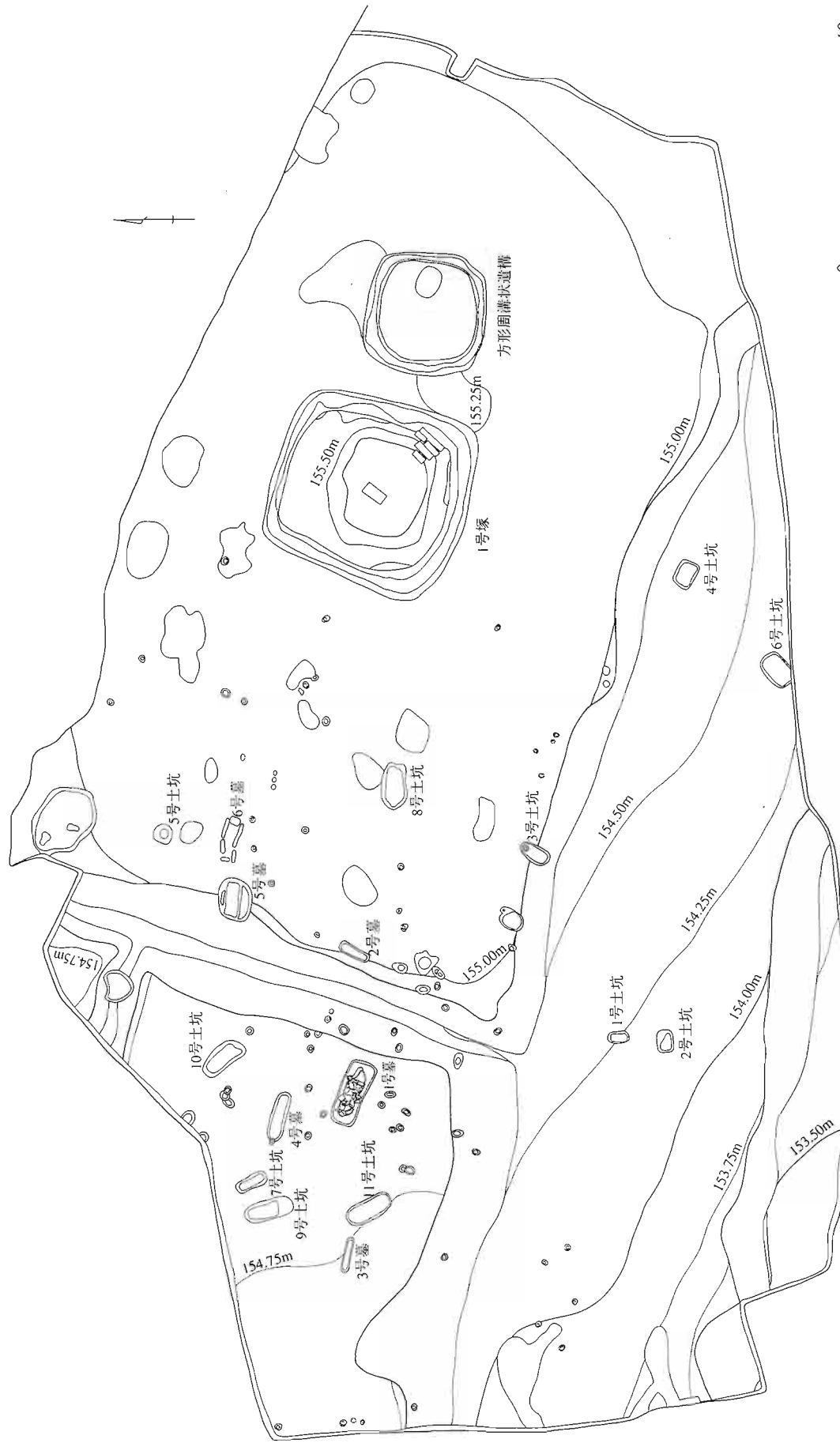
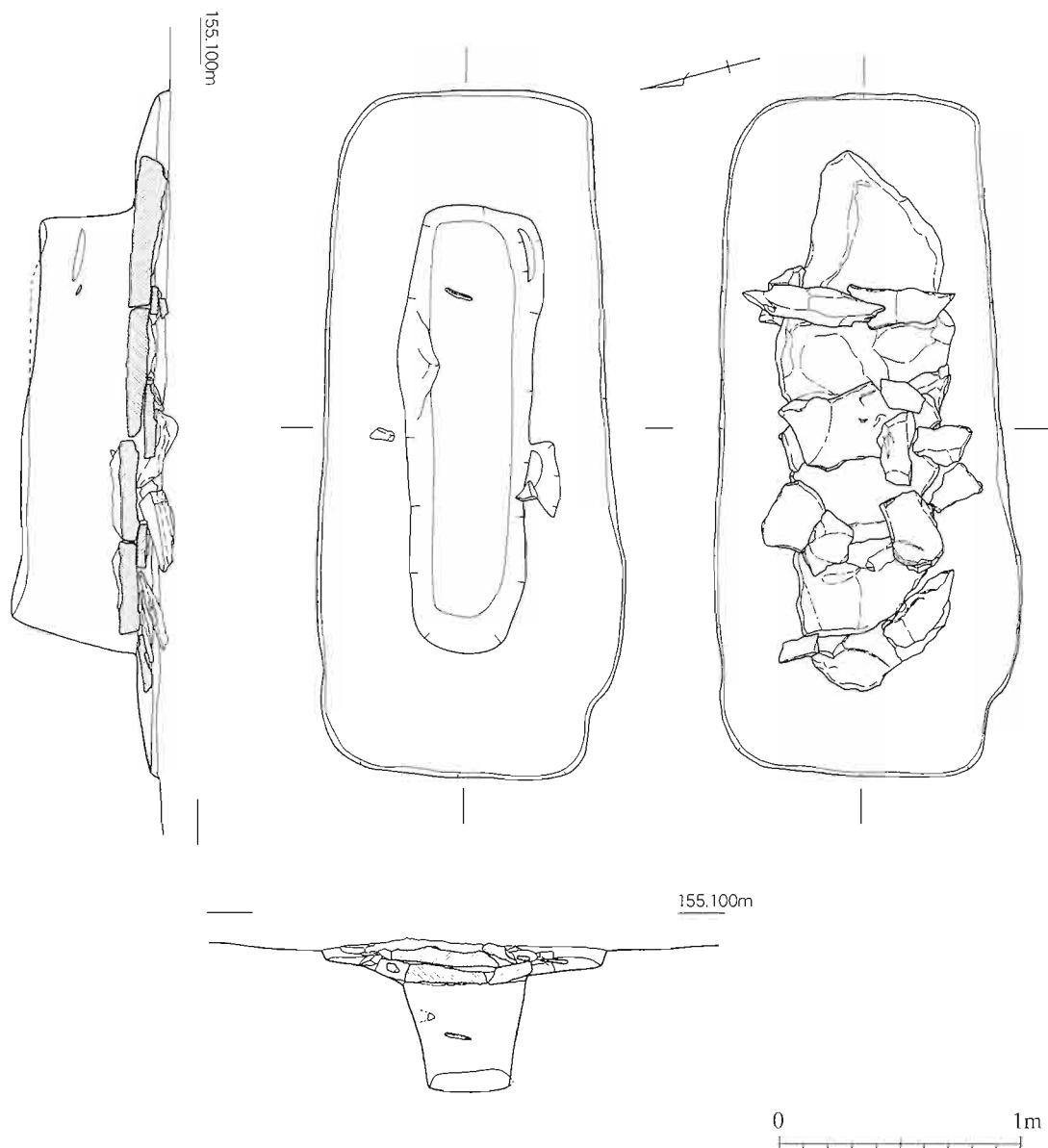


写真2 1号墓遺物出土状況

10m

第3図 遺構配置図 (1/250)





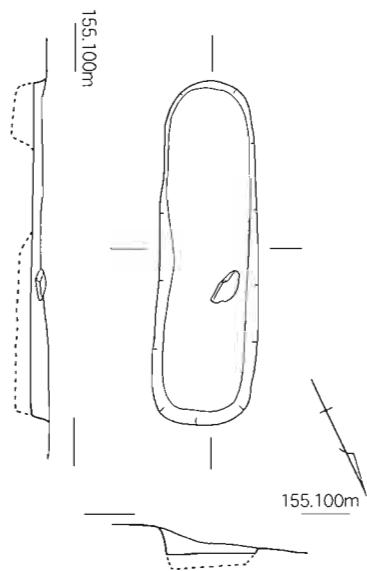
第4図 1号墓実測図 (1/30)

#### 6号墓 (第5図5)

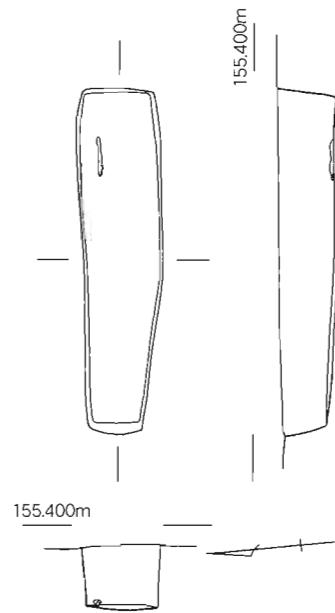
箱式石棺墓である。主軸をN-79°-Wにとる。規模は抜取り痕の中心で長軸1m60cm、短軸47cmである。一部抜取り痕に安山岩の石材片が見られる。その幅から頭位は西方向と考えられる。また、遺構面が大きく削られているため、床面についてははっきりとしない。遺物の出土はない。

#### 出土遺物 (第6図、第1表、図版6-1~5)

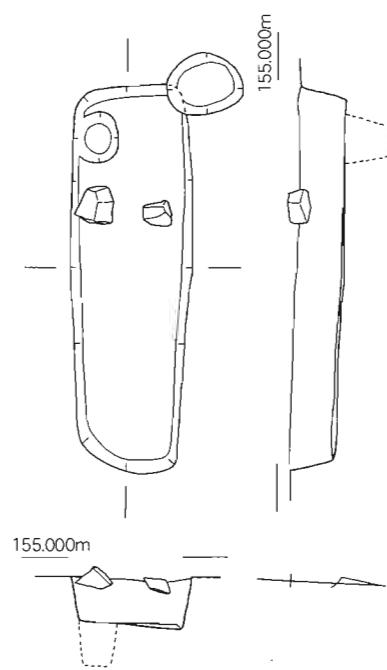
遺物は1~3号墓より出土している。1号墓からは刀子が1点出土した(第6図31)。長さは10.7cm、幅は最大で1.3cmである。2号墓からは片岩系と思われる石材を使用した小玉33点(図化は完形のもの27点、第6図1~27・第1表)、蛇紋岩製の勾玉が1点(第6図28)、刀子が1点(第6図30)が出土した。小玉は径2.4~3.5mmで平均径2.9mm、孔径0.7~1.4mmで平均孔径0.9mm、高さは0.9~2.6mmで平均の高さが1.6mmである。勾玉は完形で、最大長2.6cm、重さは2.1gである。刀子は残存長8.0cm、最大幅1.1cmである。刃部先端は欠損していた。1号墓出土の鉄鏃は残存長15.1cm、幅は5~7mmである。長頸片刀箭式で鏃身断面が平刃造である。茎部を欠損していた。



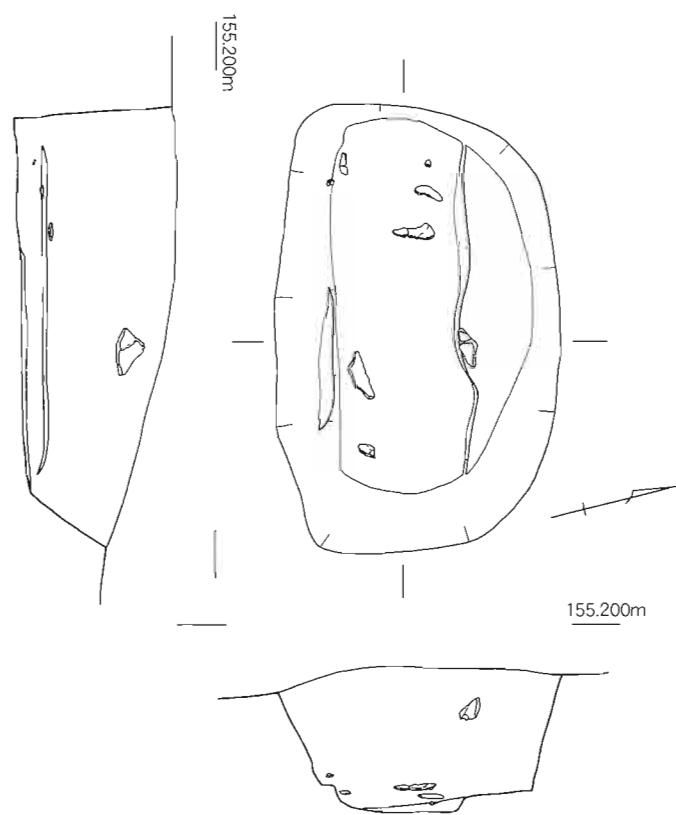
2号墓



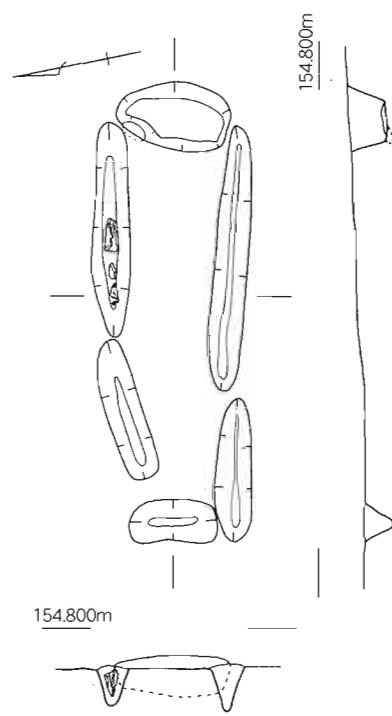
3号墓



4号墓



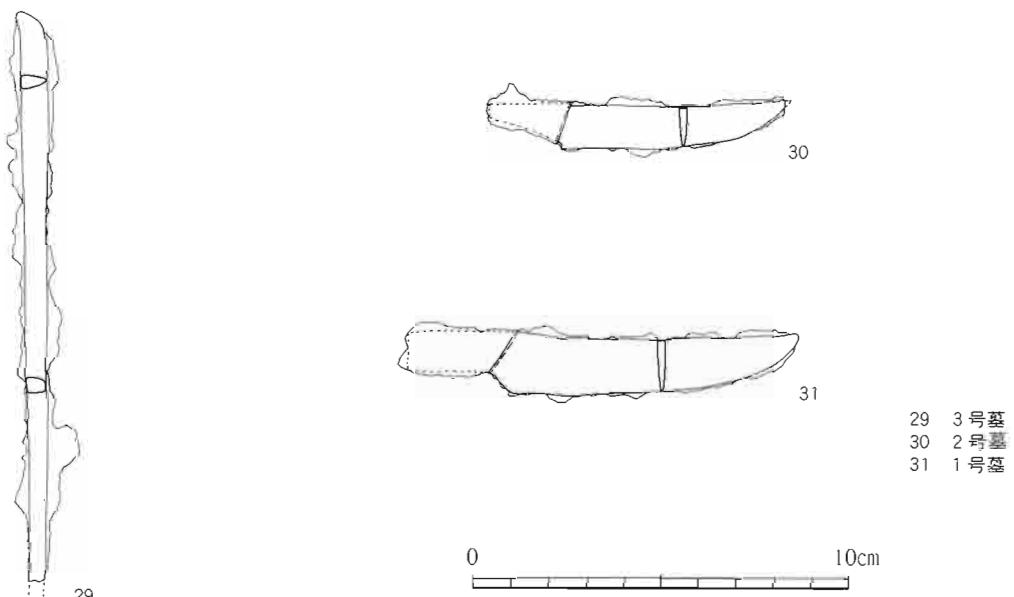
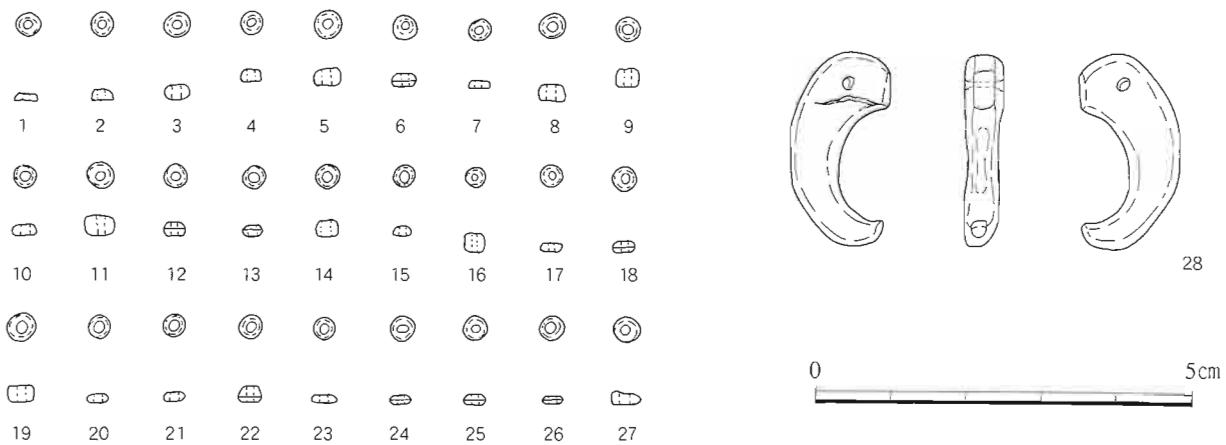
5号墓



6号墓



第5図 2～6号墓実測図 (1/30)



第6図 墓出土遺物実測図 (玉…1/1、鉄器…1/2)

番号	径(mm)	孔径(mm)	高さ(mm)	重量(g)	色	番号	径(mm)	孔径(mm)	高さ(mm)	重量(g)	色
1	2.4	0.9	0.9	0.1未満	緑灰色	15	2.5	0.9	1.4	0.1未満	緑灰色
2	2.7	0.8	1.2	0.1未満	緑灰色	16	2.9	0.7	2.0	0.1	緑灰色
3	2.5	0.8	1.7	0.1	緑灰色	17	2.7	0.7	1.3	0.1未満	緑灰色
4	3.0	0.7	1.5	0.1未満	緑灰色	18	2.9	0.9	2.3	0.1	緑灰色
5	3.4	1.2	2.3	0.1	緑灰色	19	3.5	1.2	1.9	0.1	緑灰色
6	2.9	1.0	1.8	0.1未満	緑灰色	20	3.1	1.1	1.7	0.1	緑灰色
7	2.8	0.7	1.0	0.1未満	緑灰色	21	2.8	0.9	1.0	0.1未満	緑灰色
8	2.8	1.1	2.2	0.1	緑灰色	22	2.9	0.7	1.9	0.1未満	緑灰色
9	2.8	1.1	2.1	0.1	緑灰色	23	2.7	0.8	1.5	0.1	緑灰色
10	2.8	0.9	1.5	0.1	緑灰色	24	2.8	0.9	1.2	0.1	緑灰色
11	3.4	1.2	2.6	0.1	緑灰色	25	2.9	0.9	1.3	0.1未満	緑灰色
12	3.0	0.9	1.8	0.1未満	緑灰色	26	2.6	0.9	1.0	0.1未満	緑灰色
13	2.6	0.8	1.3	0.1	緑灰色	27	3.3	1.1	1.3	0.1	緑灰色
14	2.9	1.4	2.2	0.1	緑灰色						

第1表 出土小玉観察表

## (2) 土坑 (第7、8図)

土坑は全部で11基見つかった

### 1号土坑 (第7図1)

主軸をN-96°-Wにとり、平面形が隅丸長方形を呈する土坑である。長軸89cm、短軸41cm、深さは上面が削平されていることもあり、3~6cmである。遺物は出土しなかった。

### 2号土坑 (第7図2)

主軸をN-98°-Wにとり、隅丸長方形の平面を呈する土坑であるが、下場はやや北東隅がやや不定形を呈する。規模は長軸が92cm、短軸54cm、深さは27cmである。埋土中より石材片が出土したが、この土坑に伴うものかどうかは不明である。遺物は出土しなかった。

### 3号土坑 (第7図3)

主軸をN-74°-Eにとり、平面形は不定形を呈する土坑である。規模は長軸1m33cm、短軸75cm、深さ10cmである。土坑底部は北から南に向かって傾斜している。土坑内北側に焼土の集中する部分があり、その下部にはピットが掘られていた。この土坑と直接的な関係があるかどうかは不明である。遺物の出土はなかった。

### 4号土坑 (第7図4)

平面形は長方形を呈し、主軸をN-72°-Wにとる。規模は長軸1m10cm、短軸75cm、深さ28cmである。遺物は出土しなかった。

### 5号土坑 (第7図5)

この土坑は他の土坑と異なり、平面形は円形である。規模は径82~85cm、深さ98cmで主軸をN-47°-Wにとる。深さ約70cmの位置に段が見られる。土坑の底や周壁にピットがみられるが、攪乱と考えられる。遺物は出土しなかった。

### 6号土坑 (第7図6)

この土坑は調査区外に一部出ているが、長軸1m51cm、短軸83cm、深さ41~46cmの橢円形に近い平面形を呈する。主軸はN-45°-Wにとる。遺物は出土しなかった。

### 7号土坑 (第7図7)

平面形が橢円形を呈する土坑である。規模は長軸1m34cm、短軸61cm、深さ12~37cmである。主軸をN-23°-Wにとる。平面形は橢円形を呈する。土坑底は東側が深さ12cmと浅く、西側に徐々に下がって行く。出土遺物はなかった。

### 8号土坑 (第8図1)

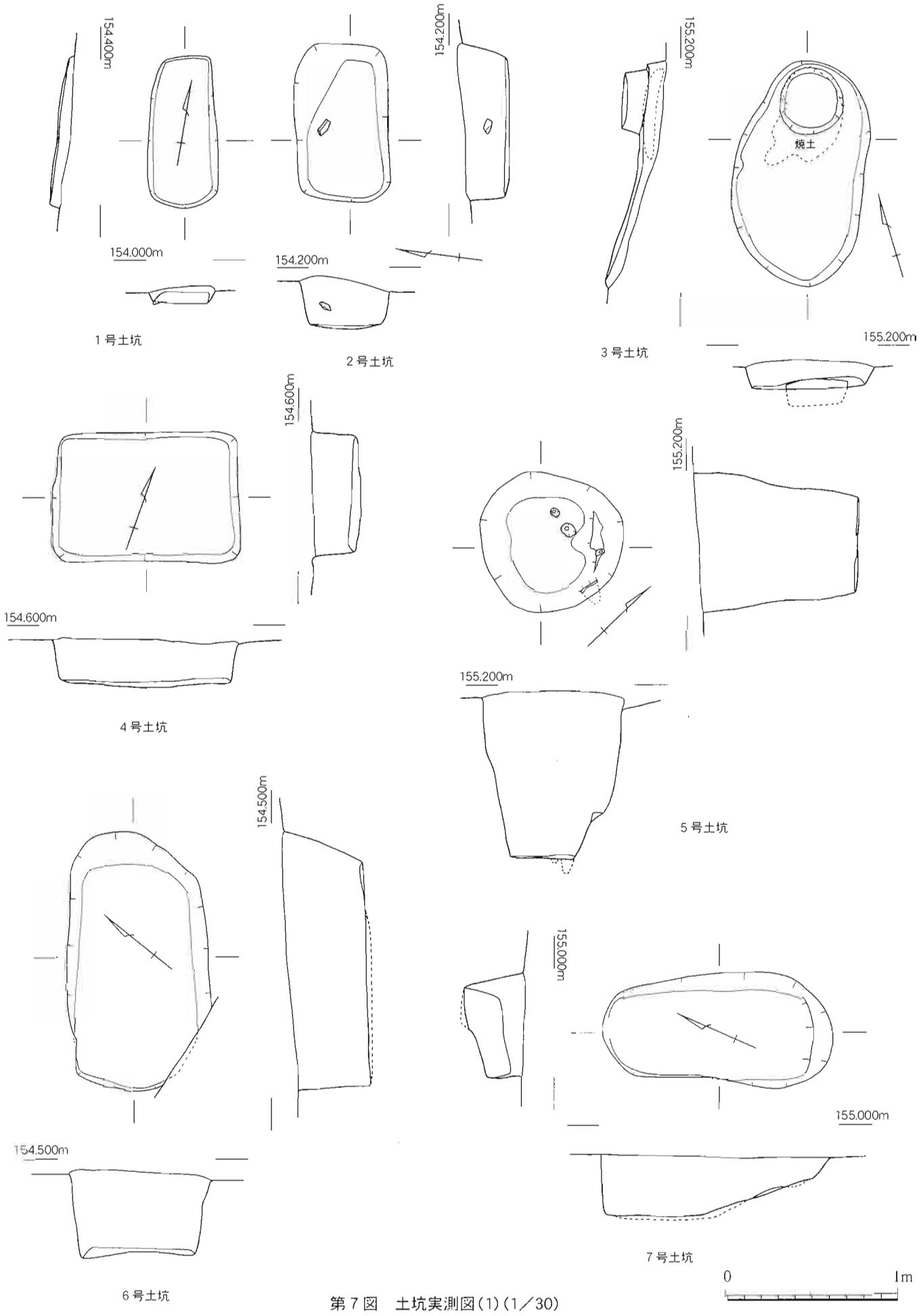
この土坑は不定形な平面形を呈する。主軸をN-90°-Wにとり、規模は長軸1m91cm、短軸1m13cm、深さ39cmである。埋土中に礫が出土したが、遺物の出土はなかった。

### 9号土坑 (第8図2)

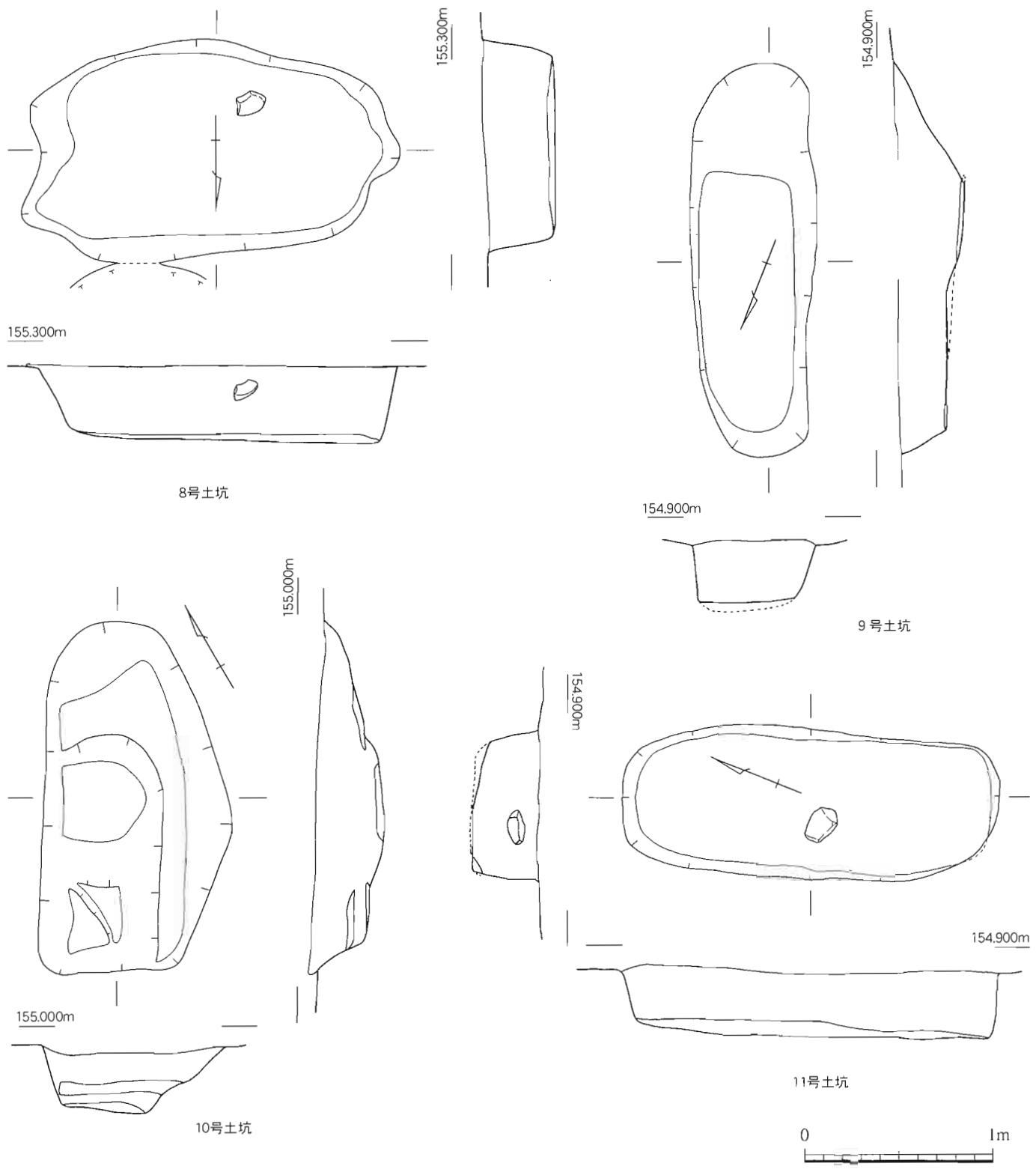
この土坑は細長い橢円形を呈し、その規模は長軸2m8cm、短軸65cm、深さ24~34cmである。主軸をN-22°-Wにとる。土坑底は南東側から南東側の緩やかに傾斜した部分がやや深くなっている。遺物は出土しなかった。

### 10号土坑 (第8図3)

この土坑は不定形な平面形を呈し、主軸をN-26°-Wにとる。規模は長軸1m86cm、短軸97cm、深さは31cmである。土坑内は数段に分かれ、攪乱を受けている可能性がある。遺物の出土はなかった。



第7図 土坑実測図(1)(1/30)



第8図 土坑実測図(2)(1/30)

#### 11号土坑（第8図4）

平面形が隅丸長方形を呈する土坑である。規模は長軸2m、短軸80cmで、主軸をN-30°-Wにとる。埋土中から礫が出土したが、遺物は出土しなかった。

### (3) その他の遺構

調査区の東側において、主軸をほぼ南北にとる方形の塚ならびに方形周溝状遺構が東西に並んで発見された。1号塚はその上に笠塔婆が建てられていた。一方、方形周溝状遺構は1号塚の1m東側で検出された。

#### 1. 1号塚（第9、10、12図、図版5）

1号塚は調査時の現状で塚の下場のラインで南北5m12cm、東西5m74cm+α、高さは塚の下端より約80cmで平面形は長方形気味である。主軸はN-15°-Wである。その周囲には断面が船底状を呈する周溝が巡らされていた。塚頂部には笠塔婆が建てられており、その正面には石階段が置かれていた。

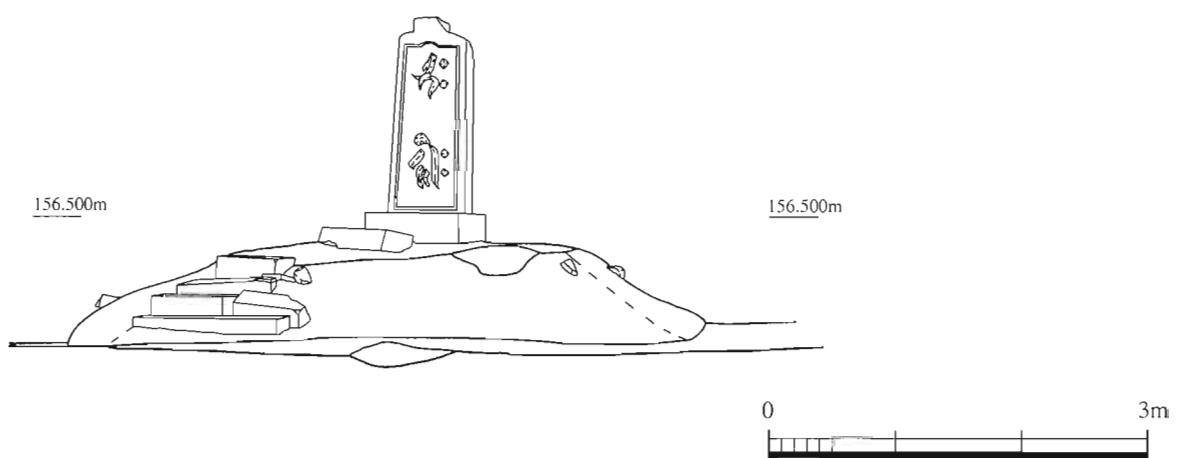
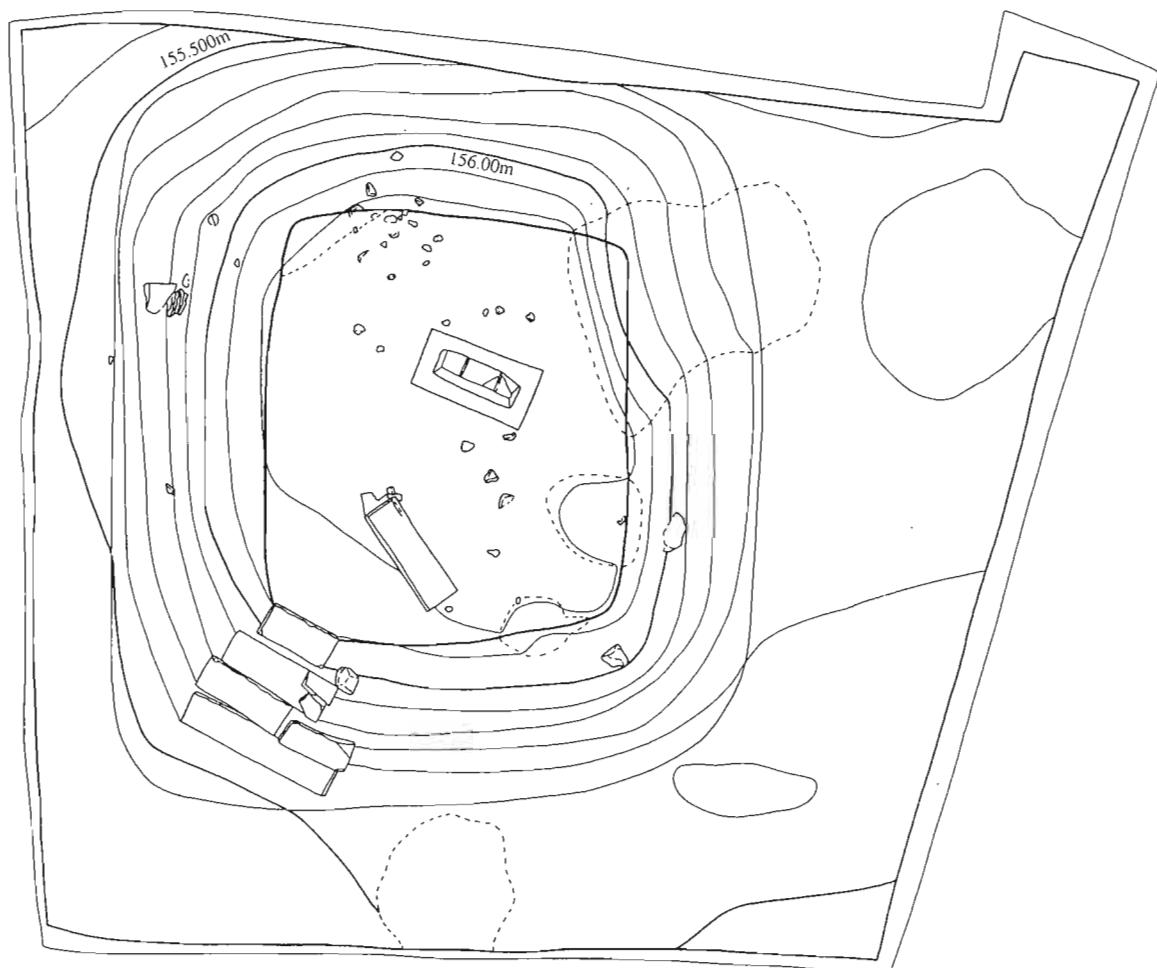
#### 層序（第10図、図版4）

1号塚の土層からその構築過程を観察することができた。上層から1、3、4、7、8層は木の根などによる搅乱層であり、2、5、6、9、10、11、14層がこの塚の盛土部分になる。12、13、15～19層は塚表土の流土と考えられ、20～23層は周溝の埋土である。塚の構築は、まず地山を整地し、14層の茶褐色粘質土が盛られ、その後、11層の暗褐色粘質土を置くことで、地均しをしたと思われる。続いて9層の黒褐色粘質土を盛った後、これも均すために6層の明褐色粘質土が置かれ、その後5層、2層の順に構築されていったことが窺える。古墳の構築過程を想起させる版築状の盛土が明確に見られることは特筆すべきであろう。また、周溝については、埋土の堆積状況から、それが塚の築造時に掘られたものかどうかは判然としない。

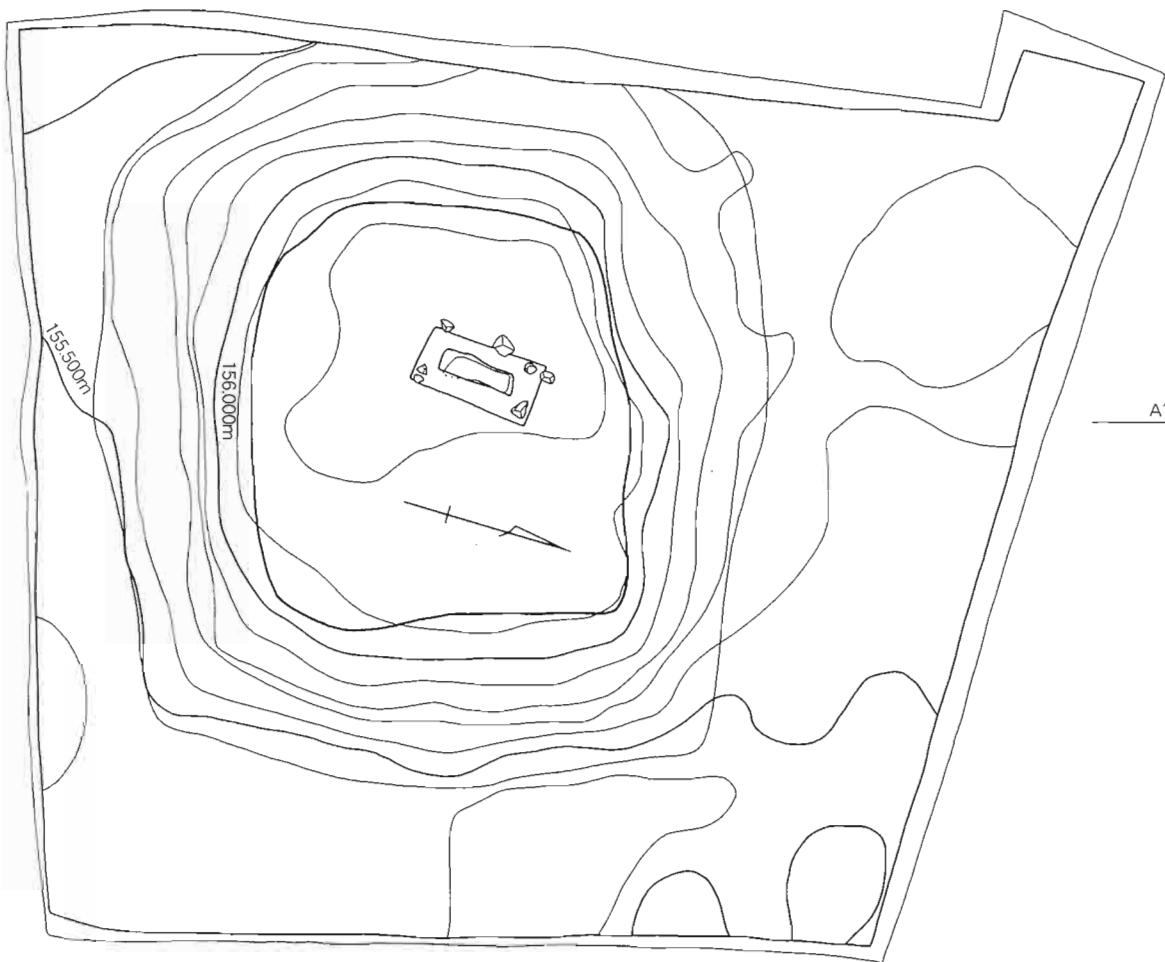
また、塚下部で確認された地山面は周囲の畠の高さより50cmほど高い位置で検出された。これについて塚の構築時に本体部分を残して周囲を削った可能性や後年、周囲の畠を開墾する際に塚部分を残して掘削した可能性などが考えられる。いずれにしても塚の造営地の選定は、その当初から平坦地に土を盛っていく労力を考えれば、ある程度は周囲より高い地点で構築していったと考えられる。

#### 出土遺物（第11図、図版6-6～14）

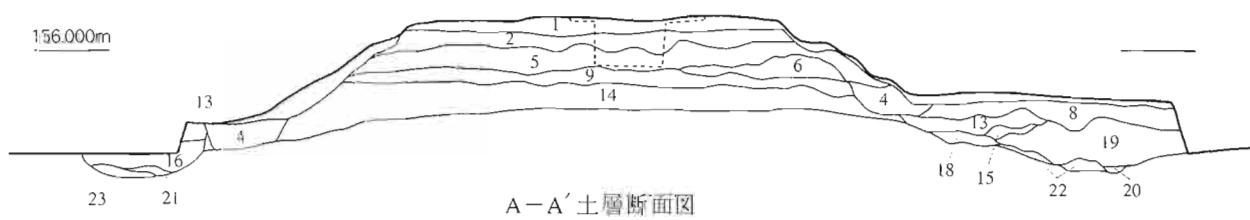
塚の掘り下げ時に出土した遺物である。いずれも土師質土器である。1は小皿で復元径6.0cm、復元底径4.4cm、高さ1.5cmで、色調は黄褐色である。胎土は白色砂粒・長石を含む。口縁部は直線的に立ち上がる。底部は回転糸切りである。内面は磨耗が激しく、調整は不明である。2は小皿で復元径6.4cm、復元底径4.8cm、高さは1.8cmで、色調は淡黄褐色である。胎土は白色砂粒・長石・角閃石を含む。底部、内面ともに磨耗が激しく調整は不明である。口縁部は直線的に立ち上がる。3は椀で復元径12.4cm、復元底径9.0cm、高さは2.8cmで色調は淡黄褐色である。胎土は白色砂粒・長石を含む。外面の調整は回転ハケが施されている。内面は調整不明である。口縁部は直線的に立ち上がる。内・外面ともに煤が付着している。4～7は底部から立ち上がりにかけての一部しか残っていないが、小皿と考えられる。このうち4の底部は回転糸切りである。色調は黄褐色で胎土は白色砂粒・長石を含む。5の底部には、轆轤から切り離し後、何らかの当て具を当てた痕跡が見られる。色調は淡黄褐色である。胎土は白色砂粒・長石・角閃石を含む。6は磨耗が激しく、内外面とも調整は不明である。色調は淡黄褐色で胎土に白色砂粒・長石・角閃石を含む。7は6と同様、器面の磨耗が激しい。色調は淡黄褐色で胎土に白色砂粒・長石・角閃石を含む。他に近代以降のものと考えられる小壺（図版6-13）、榼を挿す瓶状の磁器（図版6-14）が出土した。



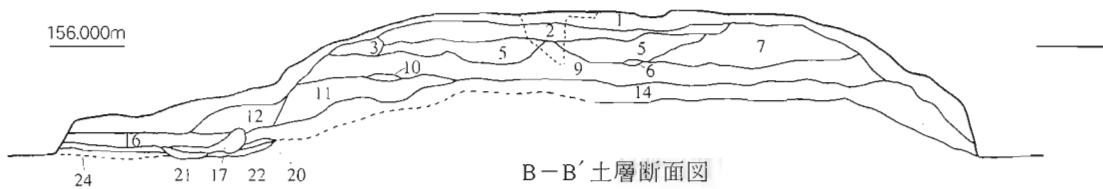
第9図 1号塚調査前測量図 (1/60)



1 表土	9 明褐色粘質土	17 暗褐色粘質土
2 褐色粘質土	10 暗赤褐色粘質土	18 暗褐色粘質土
3 暗褐色粘質土	11 暗褐色粘質土	19 茶褐色粘質土
4 茶褐色土	12 黑褐色粘質土	20 明褐色粘質土
5 黑褐色粘質土	13 暗褐色粘質土	21 暗褐色粘質土
6 明褐色粘質土	14 明褐色粘質土	22 褐色粘質土
7 褐色粘質土	15 明褐色粘質土	23 暗褐色粘質土
8 暗褐色粘質土	16 暗赤褐色粘質土	24 暗褐色砂質土



A-A' 土層断面図



B-B' 土層断面図

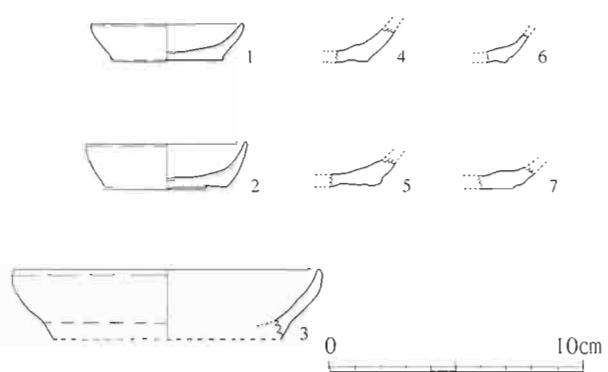


第10図 1号塚表土除去後測量図及び土層断面図

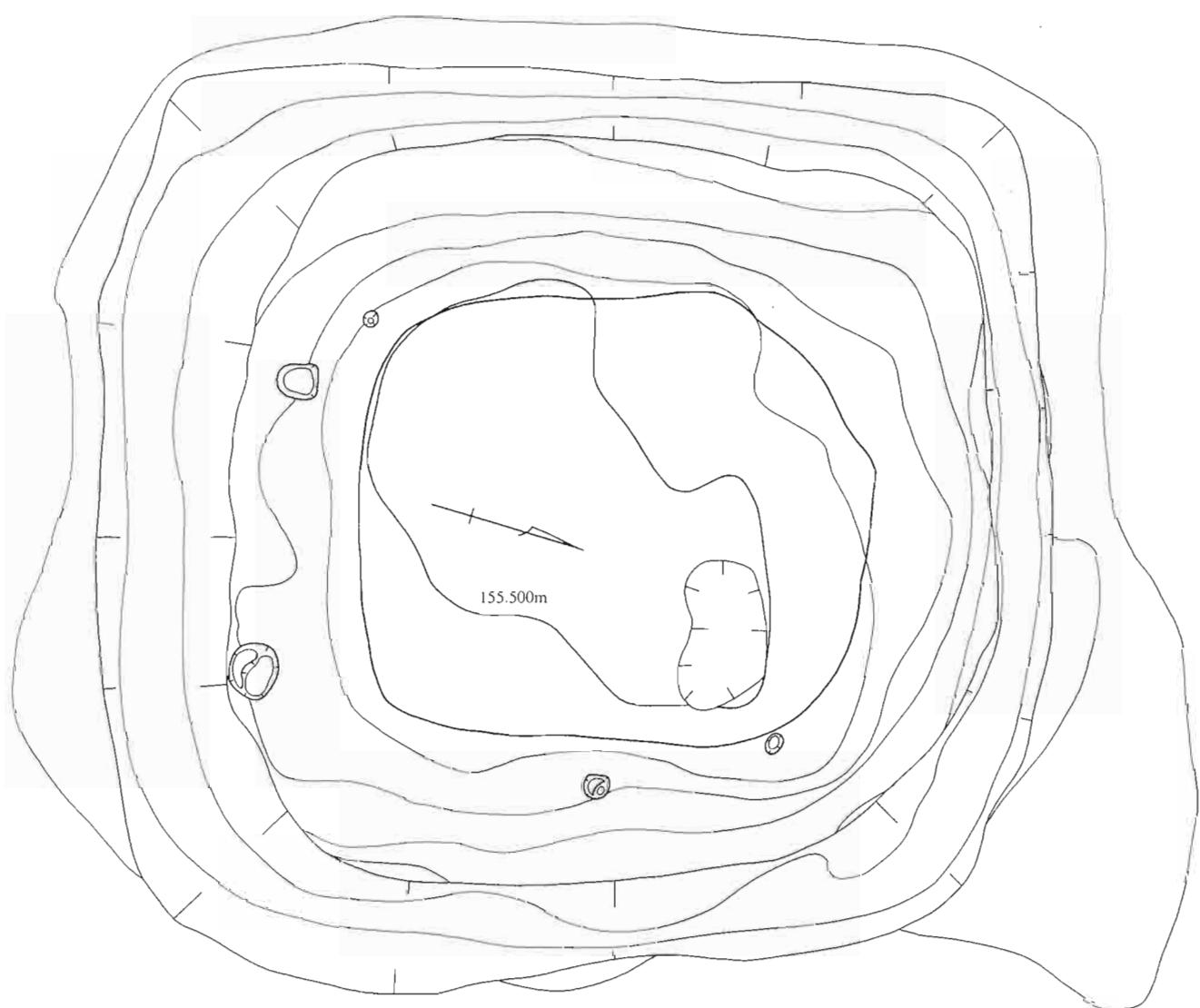
笠塔婆<sup>(1)</sup> (第13図・巻頭図版・図版4)

笠塔婆は1号塚頂部の中央よりやや西寄りに建てられていた。石材は凝灰岩である。笠塔婆の下部に基壇を据え、それをホゾ状に穿孔し、笠塔婆を建てている。笠塔婆の下部は基壇上面より約120cmあり、塚を掘り込んでいる。笠塔婆の上部は笠部をはめ込むための突起がみられるが、笠部の所在は不明である。また基壇の正面には笠塔婆の由来を示したと思われる碑文が彫られていた。

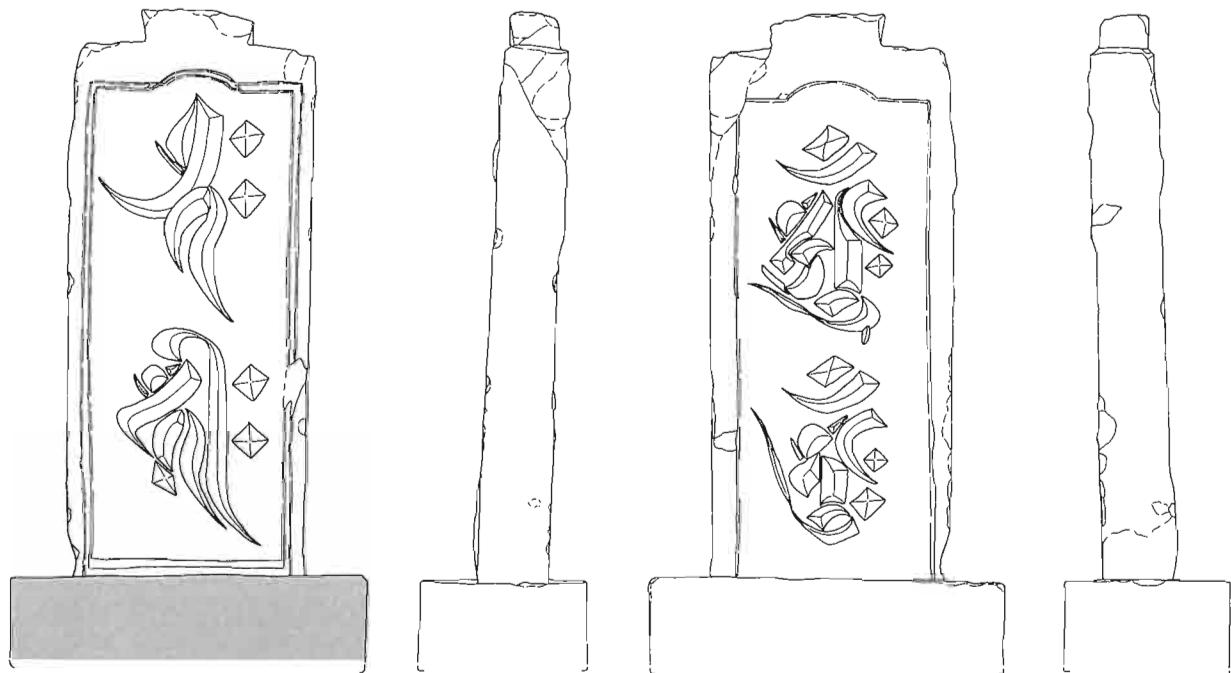
笠塔婆は基壇上面からの高さ150cm(全長270cm)、



第11図 1号塚出土土器実測図 (1/3)



第12図 1号塚盛土除去後測量図 (1/60)



※トーン部分に由来が彫られている。



第13図 笠塔婆実測図 (1/20)

幅70cm、厚さ20cmを測る。

また、笠塔婆には梵字が彫り込まれている。塚斜面に置かれた石段を正面とした場合、正面上段には釈迦（バク）、下段には弥陀（キリーク）が、裏面上段には胎藏界大日如来（アーンク）が、下段には金剛界大日如来（バーンク）が彫られている。さらに、この彫り込み面には墨が塗られた痕跡が見られた。また、この梵字を彫り込んだ面には二段の削り込みが見られ、笠塔婆としては特異な形態といえる。

なお、調査後、この笠塔婆は元大波羅神社の境内に移転、安置されている。

笠塔婆の年代については、特異な形態であることから年代の特定は困難である。しかし、梵字の彫り方が薬研彫りであることから、南北朝時代の年代が考えられる。

基壇の碑文には

大願主一結 諸衆各廿一 血綠衆十九人

右志者為面 面聖靈也 崇光天皇

觀應元年 庚寅十一月七日 敬白

大正三年マテ 三百六十五年 足利尊氏

將軍ヨリ 十三代目ニ當タル

と右から縦書きで彫り込まれていた。(写真3)

これは「諸衆各廿一 血綠衆十九人」の「聖靈」を慰靈する内容であり、崇光天皇の時代、觀應元年(1350年)庚申十一月七日の文字が彫られている。後半には「大正三年」の文字があり、基壇は少なくとも大正以降に作られたものであることから碑文の



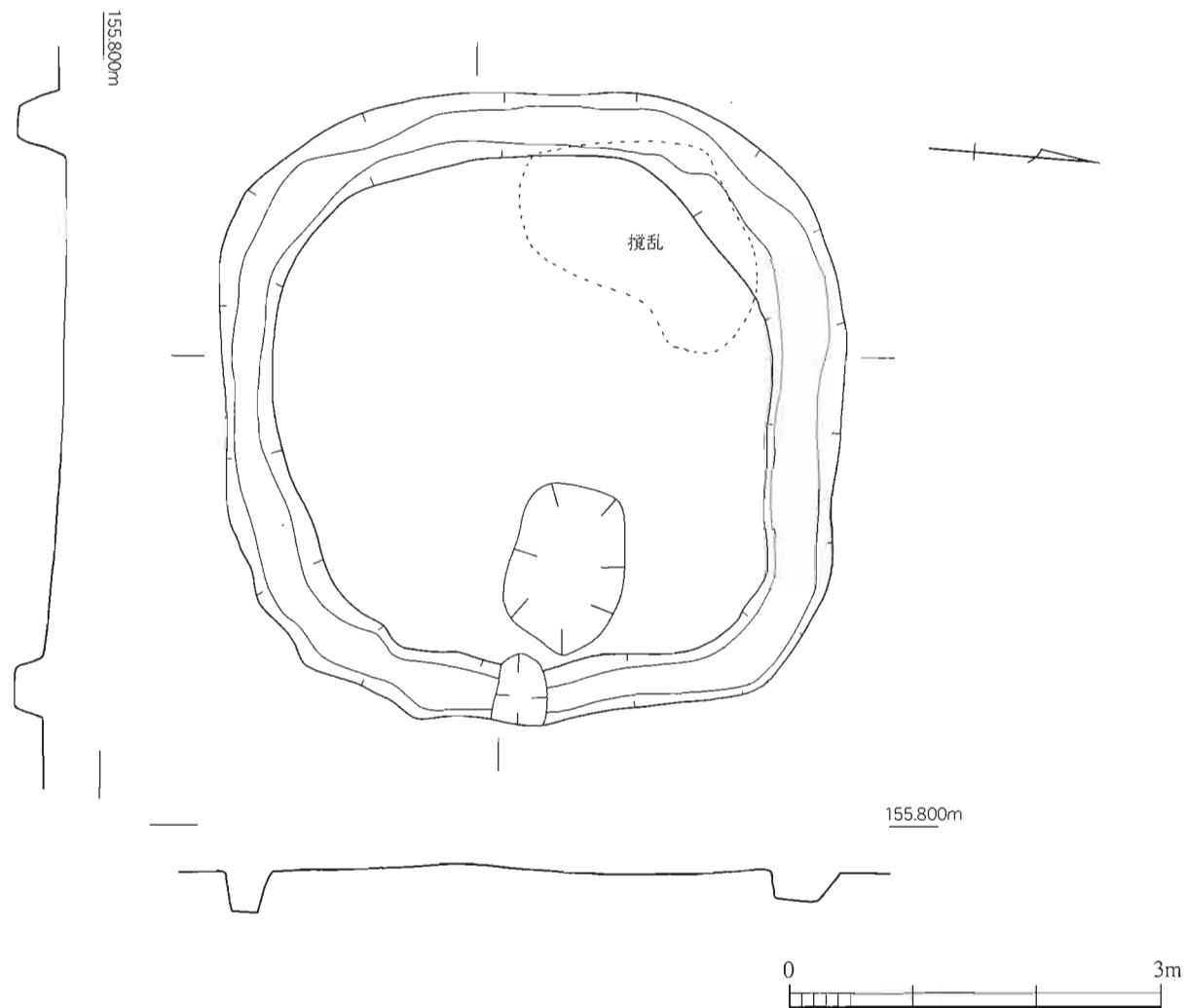
写真3 基壇碑文

内容をそのまま笠塔婆の造立年代としては捉えにくいが、上下2段に梵字を彫り込むものとして東国東郡安岐町朝来所在の護聖寺板碑に見られる。この笠塔婆には「正応四年（1291）卯月廿七孝子敬白」の碑文があり、またこれと並んで立っている笠塔婆には薬研彫りで梵字が彫られ、嘉暦四年（1329）の銘が見られる。また、宇佐郡安心院町所在の佐田社板碑も梵字が薬研彫りで、正慶元年（1332）、元弘3年（1333）造立の銘が見られる。これらが13世紀末から14世紀前半にかけて見られるものと考えると、この笠塔婆の碑文に刻まれている年代、1350年前後の時期は妥当なものと考えられる。ただ、基壇の碑文後半の内容については、今後の検討が必要である。

## 2. 方形周溝状遺構（第14図・図版5）

南北4.96m、東西5.06mの隅丸方形を呈し、主軸はN-84°-Eである。周溝が巡らされており、その規模は幅50~60cm、深さ25~30cmで断面形は逆台形を呈する。1号塚の周溝の断面形が緩やかな舟底状を呈するのとは対照的である。周溝内からは遺物は出土しなかった。

註（1）当初、調査時点では板碑として捉えていたが、板碑の典型的な形態とは異なり、塔身上部に笠を載せていたことが推定できることから笠塔婆として報告する。



第14図 方形周溝状遺構測量図 (1/60)

## IV まとめ

今回の調査では墓 6 基、土坑 11 基、塚 1 基、方形周溝状遺構 1 基が調査された。

墓は箱式石棺墓 1 基（6 号墓）、石蓋土坑墓 1 基（1 号墓）、その他土坑のみの墓（2～5 号墓）4 基である。遺物は 1 号墓からは刀子、2 号墓からは刀子、小玉、勾玉、3 号墓からは鉄鏃が出土している。これらのうち、刀子や玉類からは明確な時期決定が難しい。そこで 3 号墓から出土した鉄鏃をみていく。この型式の鉄鏃は一般に 6 世紀以前から見ることができるが、3 号墓出土の鉄鏃は鏃身部と範被部に境に段が見られない。この種の鉄鏃は 6 世紀後半になってから出現することが指摘されていることから<sup>(1)</sup>、3 号墓の年代は 6 世紀後半とみることが妥当と考えられる。他の墓の時期はわからないが、本遺跡の 2 次調査では弥生時代後期の甕棺墓が発見されていることもあり<sup>(2)</sup>、この一帯が弥生時代以来、連綿と続く墓群であった可能性も指摘できる。

さらに 6 世紀後半の土坑墓の存在は、盆地内において 5 世紀後半以降、墓制の主流が横穴墓になるのに対して、この地域では弥生時代以来の伝統的な墓制が営まれていたこと示すものであり、注目される。

土坑は 11 基発見された。今回の報告の中では土坑としたものの、棺材や遺物が出土していないことから墓と断定できず、その可能性が含まれているものもある。また、その時期についても不明である。4 号土坑や 6 号土坑などは長方形に近い平面形を呈しており、壁の立ち上がりも垂直に近いことから墓の可能性も考えられる。

1 号塚については、土層断面の観察からその構築過程が判明した。地山の整地後、土を版築状に盛っていったことがわかった。その過程で地均しを行いながら土を盛っていくといった丁寧なつくりが見てとれる。次にこの 1 号塚の性格であるが、主体部と思われるものが発見できなかったことから塚の頂部に建てられていた笠塔婆との関係が重要になってくると考えられる。笠塔婆の時期は前述のように 14 世紀中葉から後半の時期に比定できると考えられる。一方、塚から出土した土師質小皿は口縁が直線的に立ち上がり、内底面に刷毛範痕も見られないことから、笠塔婆に近い 14 世紀後半に位置付けられよう。このことから塚は基壇の碑文内容のように聖靈を慰靈する笠塔婆とともに構築されたものと考えられる。しかし、笠塔婆の位置は塚の中心よりはずれた位置にあり、その主軸も塚とはずれている。笠塔婆正面の塚斜面上に置かれた石段も明らかに後世のものと考えられることから、基壇の碑文に見られる大正 3 年に動かした可能性もあり、塚の構築当初から現地にあったとは考えにくい。

方形周溝状遺構は周溝のみの検出であり、年代決定の根拠となる遺物が出ていない。周溝の断面形が祇園原遺跡<sup>(3)</sup> の円形周溝状遺構のそれに類似していることや本遺跡の 2 次調査で弥生時代の遺構が調査されていることなどから、弥生時代の遺構の可能性も指摘できる。しかし、1 号塚と主軸を同じくして、東西に並んでいることから同時期のものと考えられる。

また、今回の調査区北側の竹藪には塚状のマウンドと倒壊した石碑があることや遺跡東側を走る県道建設の際に中世の土器が見つかったことなど、遺跡周辺地域の中世期を考える上で材料は多い。今後の詳細な検討が必要であろう。

註〔1〕 飯塚武司「後期古墳出土の鉄鏃について」『研究論集』V 財團法人東京都埋蔵文化財センター 1987

〔2〕 平成 11 年度に日田市教育委員会が調査。

〔3〕 行詩志郎ほか「祇園原遺跡」『平成 7 年度（1995 年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1997

図版 1



遺跡全景（上空より）



遺跡全景（西より）

図版 2



1号墓蓋石検出状況（西より）



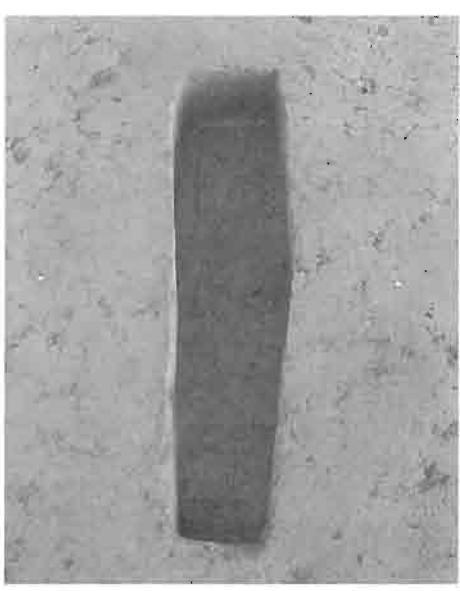
1号墓完掘状況（西より）



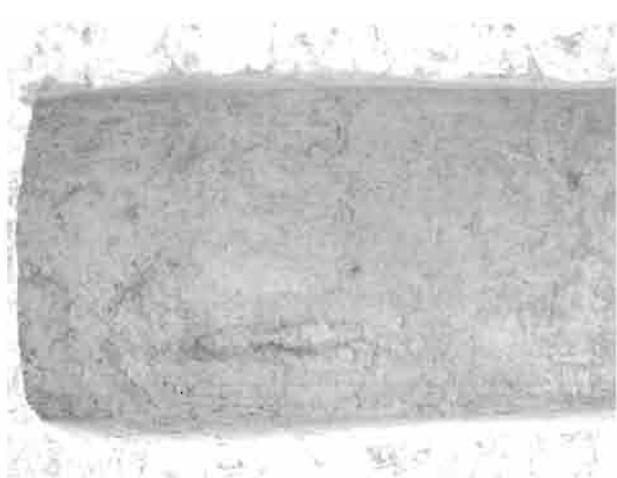
2号墓完掘状況（北東より）



2号墓遺物出土状況

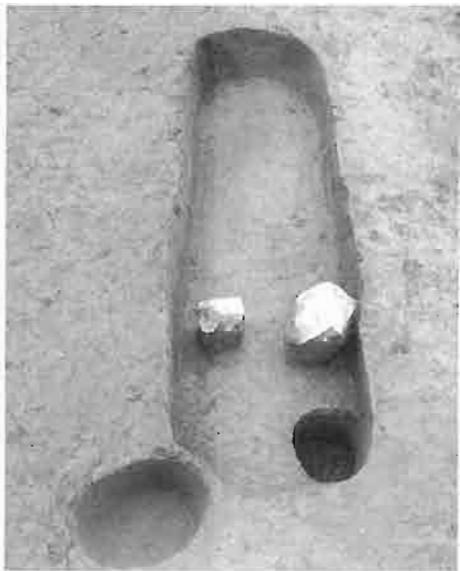


3号墓完掘状況（南より）

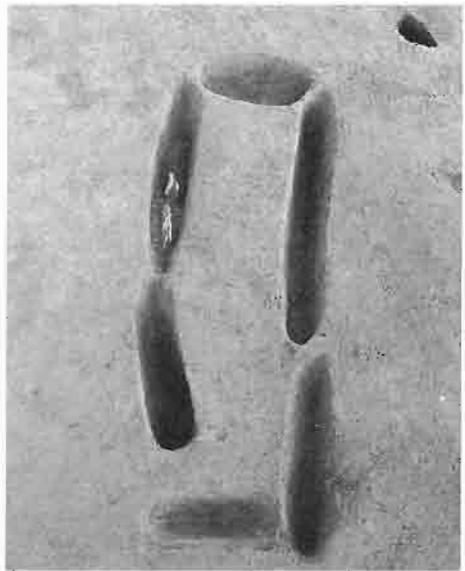


3号墓遺物出土状況

図版 3



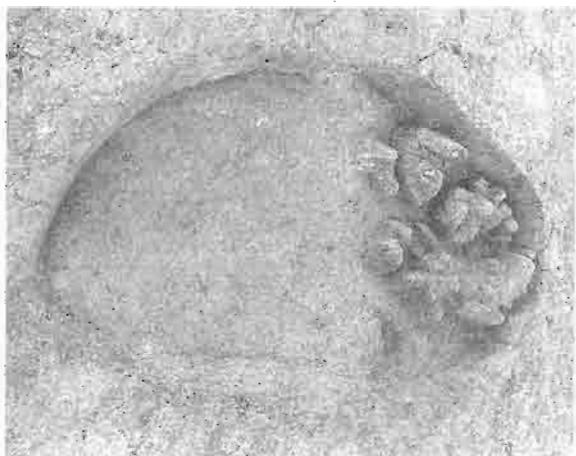
4号墓完掘状況（西より）



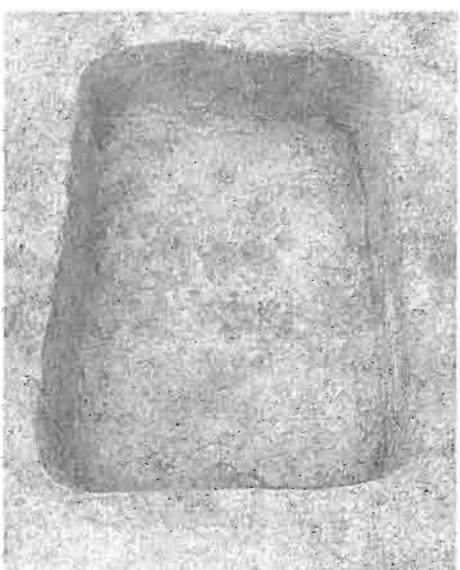
6号墓完掘状況（西より）



2号土坑完掘状況（南より）



3号土坑（南より）

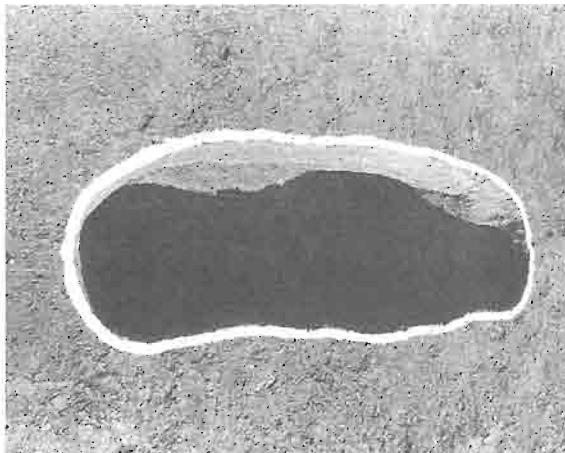


4号土坑完掘状況（東より）

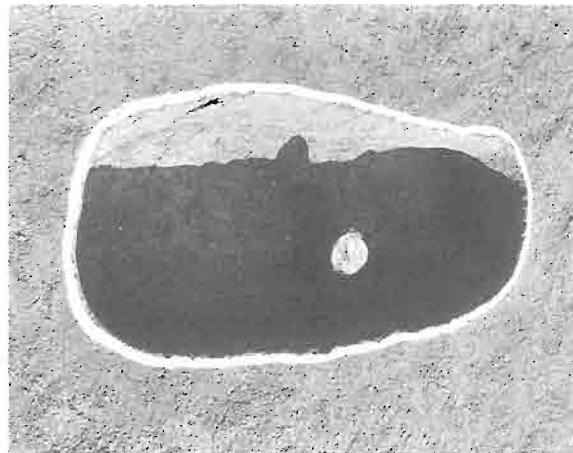


6号土坑完掘状況（北東より）

図版 4



9号土坑完掘状況（北より）



11号土坑完掘状況（北より）



笠塔婆（正面）



笠塔婆（裏面）



1号塚土層断面



1号塚完掘状況（東より）



1号塚完掘状況（西より）



1号塚・方形周溝状遺構完掘状況（東より）



方形周溝状遺構完掘状況（東より）



笠塔婆移転作業



笠塔婆移転作業

図版 6



1



2



3



4



5

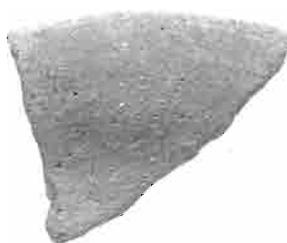
1～3…2号墓出土遺物  
4…1号墓出土遺物  
5…3号墓出土遺物



6



7



8



9



10



11



12



13



6～14…1号塚  
出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	もとみやいせき
書名	元宮遺跡
副書名	
卷次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	25
編著者名	若杉竜太・行時志郎
編集機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 大分県日田市田島2丁目6-1
発行年月日	2000年9月30日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もとみやいせき 元宮遺跡	おおいたけんひたし 大分県日田市 おおあさくくり 大字求来里 あさどうざの 字堂園607-2他	44204-6	651194			19990928 ~19991119	1,492m <sup>2</sup>	ケアハウス 建設

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
もとみやいせき 元宮遺跡	墓地	古墳 中世	石蓋土坑墓 1基 箱式石棺墓 2基 土 坑 墓 3基 土 坑 11基 塚 1基 笠 塔 婆 1基 方形周溝状遺構 1基	刀子・鉄鏃・勾玉 小玉  土師質土器	

### 元宮遺跡

— 日田市埋蔵文化財調査報告書第25集 —

平成12年9月30日

発行 日田市教育委員会  
大分県日田市田島2丁目6-1

印刷 日田時報紙器印刷(株)  
大分県日田市二串町345-3

元宮遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第25集

二〇〇〇年

日田市教育委員会